

令和6年度教育研究改革・改善プロジェクト 採択一覧（採択件数：15件、総額4,932千円）

	代表者名	所属	プロジェクト名称	プロジェクト概要
3	大久保紀一郎	教職キャリア高度化センター	教員養成課程の学生の生成AIに対するリテラシーを育成し児童生徒への指導力を高めるプログラムの開発	<p>本プロジェクトでは、教員養成課程の学生が学修に生成AIを利活用することを通し、生成AIに対するリテラシーを育成した上で、児童生徒への生成AIに関する指導力を高めるプログラムを開発することを目的とする。</p> <p>学生の生成AIの利用実態や生成AIに対する理解度、意識等を調査した上で、生成AIを理解する定期的な講習会と、普段の学修における生成AIの利活用を継続する。定期的な講習会は4回実施し、2回終了時点で中間調査、全4回の講習を終えた際に事後調査を実施する。</p> <p>得られた結果より、教員養成課程の学生が生成AIに対するリテラシーを高め、児童生徒への指導力を高めるプログラムを検討、開発する。</p>
5	秋山 雅文	附属桃山中学校	インクルーシブ的発想からつくる教材開発 —中高的総合的な探究の学習へ全員を連れていくために—	<p>附属桃山中学校と附属高校が中高一貫校となり、その中心に探究学習を位置づけた。探究学習を深めるには、一定の基礎学力が必要となる。一方で、中学校受検者のうち学力上位層が減り全体的に学力が低くなった。高校での探究課題は、環境、防災、まちづくりなどの社会的課題が中心になる。探究に向かう資質として、自分事として捉える、解決に向けて創意工夫する、必要な情報を集めることが重要である。学習に躓きのある生徒も取り残すことなく関心を高め、これらの資質に繋げるには、関係者や現場と直接関わる体験的教材、自分ならどうするか試行錯誤するシミュレーション教材等が考えられる。これらを協動的に学ぶプログラムを開発・実証する。</p>
6	井上 美鈴	附属桃山小学校	創造力を育むSTEAM教育～産学連携、小中連携による持続可能な教材の開発	<p>本研究では、STEAM教育を通じて小・中学生を対象に教科の枠に捉われない創造力の育成を目指し、産学連携を通して教材開発を行う。昨年度に附属桃山小学校において単発で行っていた授業を教材化し、他の小学校でも実践できるように研修計画を立てる。具体的に、昨年度実施した内容としては、図画工作科で日本理化学工業のキットパスを用いた窓ガラスへのアート、洛西紙工の端材を活用した段ボールを使った作品作り、メディア・コミュニケーション科でドローンを使用したプログラミングと動画編集である。連携した企業はSDGsに取り組み、障がい者雇用を重視している等、子どもたちは創造性を育むと同時にSDGsに関連した企業の理念を学習することができる。</p>
7	原田 信一	産業技術科学科	技術教育における新たな価値を生み出す力を育成する課題解決型カリキュラムに関する研究	<p>技術教育における「新たな価値を創造する力」を育成するため、生徒が「学ぶ喜び」を感じながら学習を進め、分かる喜びを感じるような方略を検討する。加えて附属学校としてプログラミング教育の、小・中・高各校種間連携・一貫教育推進について検討する。まず、生徒の実態把握・分析し、思考ツールとして教材開発、及び指導法を検討し、これまでの研究成果（対話的、深い学び）を軸に、児童生徒に「学ぶ喜び」を実感させるような課題発見・解決学習のカリキュラムを開発し、その有効性を明らかにする。研究成果は、学会等で発表、研究紀要等にまとめることで学校現場等に広く普及させ、京都教育大学及び附属学校としての使命を果たしていく。</p>
8	佐藤 克敏	附属特別支援学校、発達障害学科	知的障害特別支援学校のカリキュラム・マネジメントに関わる評価指標の作成に関する研究-附属特別支援学校と大学との共同による-	<p>知的障害の教育における教科等を合わせた指導は、法的に実施が認められているが、教科内容の扱いや評価の不十分さなどが指摘されることが多い。しかしながら、十分な根拠やエビデンスに基づく指摘ではなく、教科等を合わせた指導と教科別の指導双方のメリットやデメリットも整理されていない。その背景には子どもが何を学んだのかについて評価するための指標がないことが挙げられる。このことは附属特別支援学校の教育においても同様である。そこで本研究では、知的障害のある児童生徒の授業改善に資する資料として、子どもの実態評価指標と授業振り返りシートを作成し、授業の成果と課題を検討するための資料としての活用を検討することである。</p>
11	鈴木 英太	総合教育臨床センター	京都府内高等学校における合理的配慮の実態調査と支援ネットワークの構築	<p>本プロジェクトは、高等学校における合理的配慮の提供に関するものである。まず、合理的配慮の提供実態を調査し、現状と課題を明らかにする。次に、各高等学校と連携して、現在行われている合理的配慮の具体的内容を開示可能なレベルごとに整理する。その後、国内外の先行事例を併せて、本学「学びサポート室」が構築するデータベースを活用した、高等学校の合理的配慮に関する支援ネットワークモデルを構築することで高等学校におけるインクルーシブ教育の推進を目指す。合理的配慮の提供を含む支援情報について、府内高等学校間の交流をシームレスなものにするのと同時に、大学と地域の学校が有機的に連携するモデルケースとして全国に発信する。</p>
12	延原 理恵	家政科	人生100年時代のライフプランを考える教材開発—多様化するライフコースに対する高校生の現状を踏まえて—	<p>高等学校家庭科では、学習を通して、人の一生について、様々な生き方を理解するとともに、自らの生き方を見つめ、生涯を見通した生活を設計できるようにすることをねらいとしている。しかしながら、人生100年時代といわれる複雑な現代社会においては、多様なライフコースが存在し、住宅選択も複雑に変化し、若者のライフプランについての考え方は多様化している。そこで、本プロジェクトでは、多様化するライフコースに対する高校生の現状をふまえた授業及び教材開発を目指し、附属高等学校の家庭科教員と家政科の大学教員とが連携を図り、附属高等学校において生徒の実態を把握・分析することで、対話的で深い学びにつながる教材を検討していく。</p>

	代表者名	所属	プロジェクト名称	プロジェクト概要
13	森田 光大	附属桃山中学校	中高一貫化に伴う技術科教材の選定及び中高一貫化教育を踏まえた技術科教育の研究	令和6年度より、附属桃山中学校と附属高等学校の併設型中高一貫校第1期生が入学し、それに伴った新たなカリキュラムが必要となる。中高一貫化に対応する令和6年度の情報科・技術科における取り組みとして「中高情報及び情報技術を適切かつ効果的に活用して、問題を発見・解決したり自分の考えを形成したりしていくために必要な資質・能力を育成する。」と定めている。 本研究では、中学技術科のプログラミング教育における教材の選定及びその研究に取り組み、中高6年間をひとつのカリキュラムとして捉え、それに対応する授業の開発・実践を行う。
14	赤松 大輔	教育学科	日本とタイの英語学習者の語彙学習における認知的信念の機能の検討	本研究は、知識の性質や知ることに対する個人の信念をさす認知的信念に注目し、英語学習に対する認知的信念を測定するために、日本語版とタイ語版の心理尺度を作成することを目的とする。 研究方法としては、横断的・縦断的なオンライン調査を通してデータの収集を行う。 分析としては、作成した尺度の信頼性と妥当性を検討するための分析を行うとともに、日本とタイの間での得点比較や動機づけや学習方略との関連の比較を行う。 これらの検討を通して、英語学習に対する学習者の認知的信念を測定する尺度を日本語とタイ語の双方から開発する。さらに、日本とタイ文化を超えた文化普遍的な要素、両国それぞれに固有な要素を示すことを試みる。
17	山下 良樹	理学科	小学生を対象とした自転車を用いて親子で学習するエネルギー教育の実践	理科離れが問題視され久しく、小学校では理科が好きと回答する児童が、中学校・高校等学校へ進学するにつれ、将来の進路に理系を希望しなくなる問題がある。また授業では、主体的・対話的で深い学びが求められており、「見通し」「議論・討論」「振り返り」等の視点が重要視されている。一方で、文部科学省は脱炭素社会・省エネルギー社会の実現を推進しており、小学校の理科を含めた複数の科目でエネルギー教育が求められている。以上の課題を解決するため、本研究は、親子で実験を含めたエネルギー教育を行い、理科離れを改善し、主体的・対話的で深い学びの実現を目的とする授業実践を行う。
19	福嶋 祐貴	連合教職実践研究科	ICTを学びの道具に転換する授業及びシステムの開発～教師用ICT活用ルーブリックの開発を通して～	令和5年度プロジェクトでは、ICTを活用した協働的な授業を行うには、情報システムの整備状況以上に運用面(活用方針の共有・研修)の影響が大きいことが明らかになった。本研究では、教師のレディネスとなる知識・技能を整理し、ICTを活用した協働学習に関わる教師用ルーブリックを開発する。尺度においてはSAMRモデルを基準として用いる。あわせて、授業実践の具体例を収集し、ルーブリックに基づいて分類し、Tipsとして公表するとともに、それらをもとにシステム上の課題を明確化し、システム開発に繋げる。
22	森野 稔弘	附属高等学校	高等学校 生物基礎・生物における環境教育実践センターとの連携 —生態系への概念的 理解の醸成を目指し て—	高等学校生物基礎・生物では、生態系の成り立ちと生態系サービスについて学んでおり、本校では、臨海実習などを通して、その理解を深める機会を提供してきた。一方で、日常的に生物の姿に触れる機会については提供できていない。そこで、本件では、環境教育実践センターと連携して、授業内外で、日常的に生物の姿に触れられる機会を提供し、生物の観察を通して、生物および生態系に対する素朴概念の形成と、生態系への概念的理解の獲得に繋がる機会の提供となることをねらう。また、本件では、生徒の科学的思考力を醸成する機会の提供だけでなく、学習コンテンツとしての継続的な利用を見据えた、附属高校独自の環境教育のパッケージ化を試みる。
23	高橋 詩穂	附属桃山小学校	多様な評価方法を軸とした小中のプログラム開発	本件は、現行の学習指導要領音楽科の目標に記された生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力の育成を目指し、資質・能力のバランスのとれた学習評価を行なっていくための多面的・多角的な学習評価を意識した小中の音楽科プログラムを開発することを目的とする。そのために、①多様な評価方法を意識した授業をデザインして実践を行い、それらの実践をもとに②小・中の音楽科プログラムを作成する。また、多様な評価方法を意識した授業を発信するために、③作成したプログラムと基に報告書を作成して発信する。
26	渡邊 恵子	附属桃山中学校	多様な言語文化背景の生徒の教育に関する研究 —帰国生徒教育の成果の継承・発展の視点から—	外国人受入拡大とともに多様な言語文化背景を持つ外国人児童生徒が全国で増加している。日本語指導についてはすでにガイドラインも示されているが、文化背景を活かす実践はまだ十分ではない。本研究は、これまでの帰国生徒教育の研究成果を活かし、多様な言語文化背景の生徒の個性の伸長や自尊心を育む教育プログラムを開発することを目的とする。 令和6年度は①一般学級の中に帰国間もない生徒が少数派として在籍する第1学年、②帰国学級が設置された第2学年、③帰国後数年を経て一定程度適応が進んだ第3学年と、3つの条件にある生徒を対象として研究が実施できる。それぞれの条件に合わせた教育実践の在り方を研究する。
28	佐川 早季子	幼児教育科	幼小で学び合う対話的・協働的研修プログラムの開発～「環境」に焦点を当てて～	本プロジェクトは、京都府下の多様な幼児教育施設の幼児教育の質的向上および幼児教育と小学校教育の接続を図ることを目的として、「環境を通して行う教育」の理解を深める対話的・協働的研修プログラムを開発する。幼児教育と小学校教育との円滑な接続は積年の課題である。しかし、なかなか接続が進まない背景には、教科書のような主たる教材を用いない「環境を通して行う教育」の理解の難しさ、小学校教員の研修時間の確保の困難さ等がある。そこで、本プロジェクトでは、幼児教育施設・学校の背景に配慮しつつ、環境に焦点を当て、幼小においてどのような環境の工夫ができるかを学び合う公開保育型研修プログラムを開発する。